



命と向き合う

理事長 寺西 伊久夫

命に関わる危険な暑さが続いています。そして今、地球を包む大気の高温化が加速しています。この夏も北半球では偏西風の蛇行が影響し、最高気温が45度を超える都市、内陸部は56度を記録した地域もあります。このような体温を超えるほどの高温は、力を奪い、命をも奪ってしまいます。

七月四日のワシントンポストは、この日の暑さを「十二万五千年間で一番暑い日」と表現しました。これは単なる序章に過ぎず、世界の平均気温はこの先も上がり続け、さらに暑い夏が来ることは間違いないということ。産業革命以来、自然との共存、生物の多様性を忘れ、再生のない環境破壊を繰り返した、これが人類の営みの結果なのでしょうか。

国内でも「災害級の暑さが命を奪う」状況があります。報道によると、六月二十日から七月二十七日の間に、熱中症の疑いで亡くなった人は、東京二十三区で七十三人。その九割近い六十五人は、屋内で発見。その内、エアコンがあっても使わなかった人は三十九人もいたということ。とても胸が痛みます。

この夏、大腸癌手術から一年目を迎えましたが、陰日向に私を支えてくれた妻が、三ヶ月前にくも膜下出血で倒れ、緊急手術。幸い一命を取り留め、リハビリを経て近く退院の予定。生活も一変し、妻も私も、また試されています。「命を生きるということは、試練をもいただいて、我が身を明らかにしていくこと」だと領解しています。

